



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ドイツ語から見たゲルマン語（7）：2人称代名詞と関連表現
Author(s)	清水, 誠
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 166, 1(左)-27(左)
Issue Date	2022-03-18
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.166.l1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/84487
Type	departmental bulletin paper
File Information	03_166_Shimizu.pdf



ドイツ語から見たゲルマン語 (7)

— 2 人称代名詞と関連表現 —

清水 誠

German as a Germanic Language (7)

— 2nd Person Pronouns and Related Expressions —

(*Bulletin of the Faculty of Humanities and Human Sciences* No. 166.

Faculty of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University.

Sapporo/Japan. 2022. ISSN 2434-9771)

SHIMIZU, Makoto

(mshimizu@let.hokudai.ac.jp)

1-1. 独り言で話者を指す du —大山定一訳：ゲーテ『旅人の夜の歌』をめぐって¹

ドイツ文学者の大山定一（1904～1974）は、ゲーテ（Johann Wolfgang von

¹ 本研究は清水（2019）（2020）（2021a）（2021b）（2021c）（2021d）の続編であり，科研費の助成による（ゲルマン語類型論から見たドイツ語の新しい構造記述，基盤研究（C）（一般），19K00540）。カッコ内の用語は原則として英語名による。用例などで使用する言語名の略語は次のとおり。ア：アイスランド語，ア：アフリカーンス語，イ：イディッシュ語，サ：低地ドイツ語ヴェストファーレン方言，英：英語，オ：オランダ語，古オ：古オランダ語，ザ：（西）低地ドイツ語北低地ザクセン方言，ス：スウェーデン語，シュ：スイスドイツ語チューリヒ方言，デ：デンマーク語，ド：ドイツ語，西フ：西フリジア語，ニュ：ノルウェー語ニューノシュク，ブ：ノルウェー語ブークモール，フェ：フェーロー語，フ：北フリジア語フェリング方言，ベ：スイスドイツ語ベルン方言，フ：フランス語，

Goethe 1749～1832) の名詩『旅人の夜の歌』(ド *Wandrer's Nachtlied*) を次のように訳している(大山(訳) 1975: 103f., 下線は筆者。以下同様)。

- (1) ド Über allen Gipfeln / Ist Ruh, / In allen Wipfeln / **Spürest du** / Kaum
einen Hauch; / Die Vögelein schweigen im Walde. / **Warte nur**,
balde / **Ruhest du** auch. 山々は / はるかに暮れて, / 梢吹く / ひ
とすじの / そよぎも見えず。 / 夕鳥のこえ木立にきえぬ。 / あわれ
はや / わが身も憩わむ。

大山と親交があった中国文学の大家、吉川幸次郎(1904～1980)は、大山/吉川『洛中書問』(1974 (1946))の中で、外国文学は原語についてなすもので、翻訳は方便なので、「原文のもつだけの観念を、より多からずまたより少からず伝える」(ib. 10) のが良いとして、試訳を添えている。これに対して、大山は「立派な翻訳はあくまで強烈な文学想像の精神からうまれねばならぬ」(ib. 15) と返し、以下、翻訳と比較文学をめぐる濃密な論議が展開されていく。

大山が問題にしたのは、「東洋的な『則天去私』とはちがった……自我の拡充」(『文学ノート』(1970 (1947): 64), 以下同書から引用)に貫かれたゲーテの自然観だった。敬意を込めて控えめに批判的とした哲学者、阿部次郎(1883～1959)の訳は、(2)に示すとおりである(ib. 46)。吉川訳も併記してみよう。

- (2) 山なみの空 / しずもりぬ / 樹々のうれ / そよ風の / 呼吸^{い き}もなし / 小鳥
みな森^もに黙^もしつ / 待ちねただ — 今ぞ / しずもらむ^な汝^もも
(阿部次郎訳, 下線筆者)

ベ: ペンシルヴェニアドイツ語, ヴ: ベルギーオランダ語(フラマン語), メ: (東)低地ドイツ語メクレンブルク・フォアポマーン方言, ラ: ラテン語, ル: ルクセンブルク語, ロ: ロシア語

- (3) なべての山々に / あるは憩い / なべての梢に / まさぐるや君 / 一つの
いぶきだにも / 鳥たちは林にもだしぬ / まちねかし しばし / 憩わなん
なれもまた (吉川幸次郎訳, 下線筆者)

大山訳で目を引くのは、2 人称代名詞親称単数 du を阿部訳「汝^な」と吉川訳「君、なれ」に対して、「わが身」としている点である。「自分のところにむかって毛頭 du などと呼びかける心構えを持たない僕たち」(ib. 53) という大山の見解は、鋭い洞察だった。独り言で話者自身を指す場合、日本語ではドイツ語(橋本 2006 (1956): 90) や英語の 2 人称 du/you の代わりに、主語は用いないか、「おれも馬鹿だなあ」などと 1 人称で表す。ドイツ語でも 1 人称は使うが(ド *ich* armer Tor 哀れな愚か者のおれ, Goethe: *Faust* 358 行), それほど頻繁には用いない。日本語では、話者の視点が 1 人称と結びついているのである。「私は/*君は/*彼は 思う/悲しい」のように、思考・感情表現を 2・3 人称で言い切りの語形にできないのも、これと関係があると言えよう(国広 1982: 8)。話者から他者への「視点の移動」が起りにくいのかとも考えられる。「君のところに行くよ」に対して、ド Ich *komme* zu dir./英 I'll *come* to you. という理由は、ドイツ語や英語では聞き手に視点を移し、聞き手への接近として、ド kommen/英 come を使うという説明である。話者が主語でなければ、「もうすぐ彼/連絡が君のところに来るから」のように、「来る」も使えるわけである²。オランダ語では、Waar doet het pijn? 「どこが痛いの」に対して、*Daar* doet het pijn. 「ここが痛い」(=そこで (daar) [状況は (het)] 痛みを (pijn) 与える (doet ← doen)) のように、hier 「ここ」(英 here) ではなく、daar 「そこ」(英 there) を使うのも、その一環と言えよう。

文学作品からの豊富な例証に裏打ちされたシュナイダー (Wilhelm Schneider 1885~1979) の名著『文体論的ドイツ語文法』(ド *Stilistische*

² ただし、国広 (1982) は、「日本語では自分 (=話し手、筆者注) が中心になっていて、自分を見る心理的な目は自分から離れていない」(ib. 8) のであり、英語では「“empathy”によって話し手の心理的な目を 2 人称・3 人称の主語に移している」のではなく、「全人称ともに外から客観的に一様にながめられている」(ib. 9) と述べている。

deutsche Grammatik 1963³: 129-131) には、「内面的分裂」(ド innerer Zwiespalt, ib. 131) による独白での du と ich の交替例が挙げられている。その好例は、ゲーテの戯曲『ファウスト』(ド *Faust*) の第 1 部 (1808) に見られる。少女マルガレーテ (Margarete, グレートヒェン Gretchen) の部屋に忍び込んだファウスト博士は、その愛らしいベッドをのぞき込み、みだらな欲望に駆られて激しく自問する。

- (4) ド Und **du**? Was hat **dich** hergeführt? / Wie innig fühl **ich mich** gerührt! / Was willst **du** hier? Was wird das Herz **dir** schwer? / Armseliger Faust, **ich** kenne **dich** nicht mehr! それでおまえは (du)? 何がおまえを (dich) ここに至らせたのか。/ おれは (ich) 心底から感動している! / おまえは (du) ここで何をしようというのだ。何がおまえの心を (das Herz dir) 苦しめるのだ。/ みじめなファウストよ、おれは (ich) もうおまえを (dich) 見失ったぞ!
- (Goethe: *Faust* 2017-20)

1-2. 話題省略と主語省略—ドイツ語と西フリジア語の人称語尾 -st

「自分の心を du と呼んで」と理解した大山は、「主格の欠如をゆるさぬドイツ語の必然の語法」として、「〈spürest du〉, 〈...ruhest du〉という風に二度まで繰り返した人称代名詞」に東洋の詩には希薄な「自我の強烈さ」を看取している (52f 頁)。ただ、「烈々たる主観の感情のほのおが自然とともに燃え」(56 頁) と形容したゲーテの名詩『月に寄せて』(ド *An den Mond*) の冒頭には、主語の du は現れない。自由闊達な大山訳は「おまえの」と補っている。

- (5) ド Ø (=du) **Füllest** wieder Busch und Tal / Still mit Nebelglanz, / Ø (=du) **Lösest** endlich auch einmal / Meine Seele ganz. // Ø (=du)

Breitest über mein Gefild / Lindernd deinen Blick, / Wie des
Freundes Auge mild / Über mein Geschick. おまえの玲瓏なひか
りが / 木立や谷に / ふたたび照りわたると, / わたしの心はほのか
に明らむ。// おまえの目差しは / やさしくわが家をつつんでいる。
/ あたかも友だちの静かな眸が / わたしの運命を見まもるかのよう
に。
(大山 (訳) 1975: 96-98 『月に寄す』改題)

ドイツ語では、主文の文頭成分(前域)の省略は、「主語省略」(subject drop)
ではなく、「話題省略」(topic drop)である。ド *Ø (=ich)* Bitte ! / Danke !
「どうぞ/ありがとう (=私は頼みます/感謝します)」はその好例である。ド
Ø (=das) Weiß ich nicht. 「(それは) 私は知りません」は、話題化された対格
目的語の省略である。

さて、(4) で言及した『ファウスト』には、悪魔メフィストフェレスにそ
そのかされて青年の姿に若返ったファウスト博士が、貧しい市井の娘 (ド
ein armes junges Blut, 2897 行) のマルガレーテに接近を試みる次の有名な場
面がある。当時、Fräulein は高貴な未婚女子を指す語だった (Fritz 2005:
76)。見事に肘鉄^{ひじてつ}を食らわされるが、その純真無垢な可憐さに良からぬ感情
が芽生える。

- (6) ド FAUST: Mein schönes Fräulein, darf ich wagen, / Meinen Arm und
Geleit Ihr anzutragen? / MARGARETE: *Ø (=ich)* *Bin* weder
Fräulein weder schön, / *Ø (=ich)* *Kann* ungeleitet nach Hause gehn.
ファウスト:「お美しいご令嬢様、帰宅のお供にと私の腕をお貸しし
てもよろしいでしょうか」—マルガレーテ:「(私は) 令嬢などではあ
りません、美しくもございません、(私は) 1 人で家に帰れます」
(Goethe: *Faust* 2605-8)

これも ich「私」の話題省略だが、ドイツ語史での背景は異なる。2 人称親
称単数主語 du を欠くド *Ø (=du)* Füllest/Lösest/ *Breitest* 「(おまえは) 満た

す/解き放つ/広げる」の語尾 -st には、歴史言語学的には du が含まれているからである。ド du sing**st**「君は歌う」は、古高ドイツ語では dū sing**is** だった。ラ cantās/ワ tu chantes/ロ ty poē**sh'** (ты поё**шь**) にも、語尾 -t は見られない。語尾 -st の正体は、本来の定動詞 (V) の語尾 -s に du (<古高ド dū) が前接し、屈折語尾として文法化した結果なのである (V-st < V-ste /stə/ < V-stu < V-s + dū)。歴史言語学的には、ド **Du** fülle**st**/löse**st**/breite**st** は du の重複に由来すると言える。これは隣接する語や形態素の境界が変わって、別の語形が生じる「異分析」(metanalysis) の 1 例である。

この語尾 -st (ド du V-st) の類例に、西フリジア語 ((do) V-st) がある。次例は、19 世紀末以降のフリジア語文化運動を推進した詩人・政治家ピテル・イエレス・トルルストラ (Pieter Jelles Troelstra 1860~1930) の詩『7 月』(西フ *Heamoanne*) である。

- (7) 西フ Blanke seilen op 'e marren, / Rûkend hea yn swee op 't lân; /
Seinehotsjen, ljurkesangen, / Blauwe himel, sinnebrân; / 't Swiere
fee yn griene greiden, / Swiet gerûs troch hege reiden, / Bûgende
ieren yn 'e bou —/ Heitelân, hoe moai **bisto** ! 湖面に (op 'e
marren) 輝く (blanke) 帆船の群れ (seilen), / 地に (op 't lân) 刈
り置かれ (yn swee) 匂い立つ干し草 (rûkend hea), / 鎌を研ぐ音
(seinehotsjen), 雲雀^{ひばり}のさえずり (ljurkesangen), / 紺碧^{こんぺき}の空
(blauwe himel), 降り注ぐ陽光 (sinnebrân), / 緑の牧場に憩う (yn
griene greiden) 肥えた家畜の群れ ('t swiere fee) / 小高く茂る葎
(hege reiden) から漏れる (troch) 芳香 (swiet gerûs), / 風になび
く (bûgende) 穂波の列 (ieren yn 'e bou) —/ 祖国よ (heitelân),
おまえは (前接語 -o ← do) 何と (hoe) 美しいことか (moai bist-)
(Troelstra 1981: 290)

西フ Heitelân, hoe moai **bisto** ! 「祖国よ、おまえは何と美しいことか」(ド Vaterland, wie schön **bist du**) では、do bist (ド du bist) に対して、bisto [bɪs'to:

u] という do 「おまえ」(ド du) の接語化 (-o ← do) が起こっている。これは義務的であり、接語化しない *bist do [bɪz'do:u] は許されない (-st [zd] ← [st] は逆行同化による有声化)。

- (8) 西フ ① {**Do bist/Ø Bist**} hjoed sa moai. 君は (do/Ø) 今日 (hjoed), と
ても (sa) 美しい (bist~moai) (ド {**Du/Ø**} bist heute so schön.)
② Hjoed {**bisto/bist-Ø**} sa moai. 今日 (hjoed), 君は (-o/-Ø) とて
も美しい (ド Heute {**bist du/*bist Ø**} so schön.)
③ Hjoed bin {**ik/*Ø**} sa moai. / Hjoed is {**er/se/*Ø**} sa moai. /
Hjoed binne {**wy/jimme/se/*Ø**} sa moai. 今日, 私 (ik/*Ø) /
{彼/彼女 (er/se/*Ø)} / {私たち/君たち/彼 (女) ら (wy/jimme/se/
*Ø)} はとても美しい

(8) ①ド Ø Bist heute so schön. は話題 du 「君」の省略だが、西フ Ø Bist hjoed sa moai は主語ド 「君」の省略である。その証拠に、②西フ Hjoed bist Ø sa moai. は OK でも、②ド *Heute bist Ø so schön. は不可である。また、(8) ③からは、西フリジア語の主語省略は do に限られることがわかる。

「定動詞 -st + du」の位置に現れたド du は、定動詞 -st と連続して聞こえないこともあるが、これは音声的実現としての表層レベルでの現象であり、基底では確かに存在している。シューベルトの作曲で有名なゲーテの『魔王』(ド *Erlkönig*) で検証してみよう。(9) ①では、夜道を急ぐ馬上の父親の腕に抱えられた幼い息子が魔王が忍び寄る気配を察知して、平静を装う父親にたずねる。Vater 「お父さん」という呼びかけが挿入されても、Siehst, Vater, du ~ nicht? 「お父さん、見えないの?」のように du が現れている。(9) ②は魔王が息子に誘惑の言葉をかける箇所だが、やはり feiner Knabe 「かわいい坊や」が挿入されても、Willst, feiner Knabe, du ~ ? 「かわいい坊や~しないか」のように du が現れている。

- (9) ド ① „Mein Sohn, was birgst du so bang dein Gesicht?“ / „**Siehst**,

Vater, du den Erlkönig nicht? / Den Erlenkönig mit Kron und Schweif?“ / „Mein Sohn, das ist ein Nebelstreif.“ 「おまえ、どうしてそんなにおびえて顔を隠すのか」「お父さん、魔王が見えないの？ 冠つけて長裾を引く魔王の姿が」「おまえ、あれはただの霧の帯だ」 (Goethe: *Erlkönig*)

- ② *Willst, feiner Knabe, du* mit mir gehn? / Meine Töchter sollen dich warten schön; / Meine Töchter führen den nächtlichen Reihn / Und wiegen und tanzen und singen dich ein. かわいい坊や、いっしょにおいで / 娘たちにお相手させるから / 輪になって夜の舞を見せてくれる / 踊って歌って、いい気持ちにしてあげる (ib.)

さて、西フリジア語では主語 *do/-o* を欠く *Ø Bist* *sa moai*. / Hjoed *bist-Ø* *sa moai*. が普通で、*Do bist* [do:u bist] *sa moai*. / Hjoed *bisto* [bis'to:u] *sa moai*. は、強調・対比「君こそは」を表す。前接語 *-o* [o:u] (← *do*) が強勢を担うのは、接語として特殊だが(清水 2006: 163)、無強勢の異形態 *-e* [ə] もあり、西フ *Bist-Ø/Bisto/Biste* *hjoed sa moai*. はどれも文法的である。ただし、西フ **Do bisto* *hjoed sa moai*. という重複 (**do* ~ *V-sto*) はできない。西フリジア語文学の代表的な女流作家シムケ・クローステルモン (Simke Kloosterman 1876~1938) の情熱的な詩『何千もの人々が…』(西フ *Tûzenen...*) の一節では、*Ø Kaamste*. 「あなたはやって来た」に *dû* (*do* の異形態) を強調的に付加して、熱い思いを込めている。

- (10) 西フ *O leafste, ik hearde dy kommen*, / *Dû wiest'* yn 'e sinne, *dû wiest'* yn it ljacht, / *Dû wiest'* yn 'e bloeiende blommen !// *Dû kaamste, dû kaamste* *sa stadich deroan...* ああ、最愛の人 (*o leafste*)、私は (*ik*) あなたが来るのを (*dy kommen*) 耳にした (*hearde*)、/ 太陽の中に (*yn 'e sinne*) あなたはいた (*dû wiest'*)、光の中に (*yn it ljacht*) あなたはいた (*dû wiest'*)、/ 咲き誇る花々

の中に (yn 'e bloeiende blommen) あなたはいた (dû wiest')!//
 あなたはやって来た (dû kaamste~deroan), あなたはやって来
 た, 足取りゆるやかに (sa stadich). (Jellema ed. 1988: 60)

定動詞を含む文で顕在化しない「空主語」(null subject)としての代名詞主語を備えた言語を「空主語言語」(null-subject language)または「代名詞主語省略言語」(pro-drop language)と呼んでいる。言語類型論的には、「空主語省略」(null-subject drop)または「代名詞主語省略」(pro drop)は、動詞が主語との一致に関する豊かな形態を備えた言語に見られる傾向がある。

動詞語尾 -st がド du/西フ do 由来の -t を欠く例には、低地ドイツ語ヴェストファーレン方言 (ヴェス du bis/sings 君は~である/歌う ↔ ド du bist/singst, Durrell 1990: 82f.) やルクセンブルク語 (ル du bass/séngs 同上) がある。一方、スイスドイツ語チューリヒ方言の du+V-sch (チュ du bisch/singsch 同上) は、-sch の直後で -t が脱落した結果である (チュ er isch-Ø<-ischt, ド er ist 彼は~である, Weber 1987³: 174)。ベルン方言でも同様である。主格代名詞が弱形 i/d/s (← ich/du/es) の場合はとくにそうである。du の弱形 d (→ t) では、強調形 duu を重ねたりする (チュ Iez chasch t ene aber **duu** hälffe! さあ (iez), でも (aber) 君は (t~duu) 彼らを (ene) 手伝う (hälffe) ことができるよ (chasch)!) (Weber 1987³: 155-160, Schobinger 2007³: 64)。語尾 -st の -t を欠く語形は、スイス北西部に多く見られる (Russ 1990: 377, Marti 1985: 142)。

ペンシルヴェニアドイツ語では, du+V-scht に対して, 逆の語順では V-scht + {Ø/弱形 de [də]} のように du が de [də] に弱まり, 脱落することがある。文字表記することは稀だが, 話し言葉では V-schde/V-sch de のように -t がつかないこともある。一方, 強調・比較の場合には, V-scht に強勢を持つ du を添える。ドイツ語での発達過程に似ていると言えよう。

- (11) ペ **Du hoscht** en Buch. 君は (du) 本を (en Buch 単数) 持っている (hoscht)

{*Hoscht* {Ø/*de*}/*Hoschde*/*Hosch de*} en Buch? 君は (Ø/*de*/-*de*)
 本を持っているかい (*hoscht*/*hosch*-) (Haag 1994⁴: 42 変更)
 Ich hab en Buch. *Hoscht du* ['du] aa eens? ぼくは (*ich*) 本を持っ
 ている (*hab*)。君も (*du aa*) 一冊 (*eens*) 持っているかい (*hoscht*)
 (ib. 42 変更)

1-3. 命令形と主語—空主語の顕在化

1-3-1. アイスランド語の命令形とその周辺

空主語は復元可能な代名詞主語を前提とするので、ドイツ語の心理表現や自動詞の受動態による非人称無主語文は対象外である(ド *Es* ist mir kalt. ↔ Mir ist kalt. 私は寒い, *Es* wird im Stadtpark gebaut. ↔ Im Stadtpark wird gebaut. 町の公園では建設工事が行われている)。この場合の *es* は主語ではなく、文頭(前域)を埋める手段である。ド *Es* irrt *der Mensch*, solange er strebt. 「人間は努力する限り迷うものだ」(Goethe: *Faust* 317 行)の主語も *der Mensch* 「人間」のほうである。

ドイツ語の定形文に復元可能な空主語はないのだろうか。命令文はどうか。ゲーテの『秋思』(ド *Herbstgefühl*)の冒頭の呼びかけ *du Laub* 「汝、葡萄葉よ」は、そうではない。命令口調を封じた大山訳は、ここでも非常に独特で印象的である。

- (12) ド *Fetter grüne, du Laub*, / Am Rebengeländer / Hier mein Fenster
 herauf ! // Gedrängter quellet, / Zwillingsbeeren, und reifet /
 Schneller und glänzend voller ! 窓ちかく / 棚に生いし / みどり
 濃き葡萄葉。// 垂り房の / むらさきの実の / つぶらなる / 日ごと
 に熟れて。 (大山(訳) 1975: 84f.)

それでは、ブラームス作曲『ジプシーの歌』(ド *Zigeunerlieder*)の第7曲はどうだろう。しっとりした旋律に乗せて歌われる *Lieb du* mich 「おまえも

私を愛しておくれ」の du は、呼びかけではない。この du は wie ich dich (liebe)「私がおまえを(愛する)ように」との対比を示す命令形の主語である。

- (13) ド Kommt dir manchmal in den Sinn, mein süßes Lieb, / Was du einst mit heiligem Eide mir gelobt? / Täusch mich nicht, verlaß mich nicht, / Du weißt nicht, wie lieb ich dich hab, / **Lieb du** mich, wie ich dich, / Dann strömt Gottes Huld auf dich herab ! いとしい人よ、思い起こすことはあるだろうか / かつて神に誓いを立てて 私に約したことを / 欺き、去ることのないように / どれほどおまえを愛しているか / わかるまい / 私がおまえを愛するように、おまえも私を愛しておくれ / ならば神の慈愛がその身に下るのだから
(Fischer-Dieskau (ed.) 1995: 409)

英語、オランダ語、西フリジア語、大陸北ゲルマン語でも、普通は省略する命令形の主語を強調・対比する場合に復元することがある。(15) ④は聞き手を指す 3 人称代名詞を用いた例である ((22) ②参照)。

- (14) ① 英 I am dead to all pleasure, my true love she is gone. / **Come all you forsaken and mourn you** with me, 私は何の喜びも感じない、愛する彼女が去ってしまった / 恋人に捨てられた者たちはすべてやって来い、そして私とともに嘆くのだ
(Willow Song 『柳の歌』 1583)
- ② オ **Gajij** nou daar zitten ! 君がそこに (daar) すわりなさい (gajij ← ga Ø) よ (nou) (Donaldson 2008²: 238)
- ③ 西フ **Helje do** dat boek ! 君がその本を (dat boek) 取ってきてくれ (helje do ← helje Ø) (Popkema 2006: 191)
- ④ 西フ **Kom sy** mar by mem. ママのところに (by mem) 来なさい (女の子に kom sy ド sie / 英 she ← kom Ø) よ (mar)
(清水 2006: 154)

- ⑤ デ *Køb du* brød ! 君がパン (brød) を買って (køb du ← køb Ø) 君が買う (Rupp 2003: 160)

とくにドイツ語では、不定代名詞 jemand/eine(r)「だれか」による命令形主語の復元も可能である。ただし、これ以外の alle「皆」、niemand「だれも(～ない)」や名詞句ではむずかしく、不定詞・過去分詞による命令文に限られる (Rupp 2003: 159)。

- (15) (a) ド *Hilf* ihm doch *jemand* ! だれか(男性形)彼を手伝ってよ
Gib eine die Karten *aus*. だれか(女性形)トランプのカードを配って (以上 Duden 2009⁸: 892)
- (b) ド **Beweg niemand* sich ! だれも動くな
 **Hör alle* mal *her* ! ↔ *Alle* mal *herhören* ! 皆、よく聞いてね (不定詞)
 **Passt die ganze Kompanie* jetzt *auf* ! ↔ *Die ganze Kompanie* jetzt *aufgepasst* ! さて、全隊、敬礼せよ (過去分詞)
 (以上 Rupp 2003: 159f.)

命令形の主語表示を文法化したのが、離島北ゲルマン語に属するアイスランド語である³。ド *Warte* nur !「待ちねただ」(← warten 待つ)は、ア *Biddu* bara ! (← biða [ˈbi:ða]) となり、Biddu ! [ˈbi:ð:ɹ]「待ちなさい」は「命令形 bið [bi:ð] + 2 人称代名詞単数主格 þú [θu:]」の構成である。無強勢の þú「君」(ド du)は接語化し、動詞と融合するのが一般的である。þú をそのまま独立させて使うのは、強勢を伴って強調・対比を表す場合に限られる。

それでは、アイスランド人戯曲作家として初めて北欧全土で名声を得たヨウハン・シーグルヨウンソン (Jóhann Sigurjónsson 1880～1919) の『山のエイヴィンドゥル』(ア *Fjalla-Eyvindur* 1912) から、歌曲としても有名な『お

³ 古風な文体や慣用表現 (ア *Kom* inn ! お入りなさい ← koma 来る) は除く。

眠りなさい, 愛しい子』(ア *Sofðu, unga ástin mín*) の第3節をご紹介します。
ア Sofðu ! ['sɔvðʏ] 「眠りなさい」は「命令形 sof [sɔ:v] + þú [θu:]」(← sofa [ˈsɔ:va] 眠る) の融合である。

- (16) ア *Sofðu* lengi, *sofðu* rótt, / seint mun best að vakna. / Mæðan kenna
mun þér fljótt, / meðan hallar degi skjótt, / að mennirnir elska,
missa, gráta og sakna. お眠りなさい (sofðu) ずっと安らかに
(lengi~rótt) / 起きるのは (að vakna) 遅くて (seint) いい (mun
best) / 薄日がやがて沈む (hallar degi skjótt) ころ (meðan) / 辛
さが^{つら} (mæðan) じきに (fljótt) 教えてくれる (kenna mun þér) / 人
は皆 (mennirnir) 愛して (elska) 失い (missa) 泣いて (gráta)
惜しむ (og sakna) のを (að) (清水 2009: 164)

アイスランド語の命令形2人称複数は、直説法現在形と同形である。これはゲルマン祖語の時代からそうだった (Krahe/Meid 1969⁷: 113)。ドイツ語では *Wartet Ø* nur! のように普通は親称の主語 ihr 「君たち」を欠くが、アイスランド語では þið 「君たち」を伴う。*Bíðið þið* bara ! の発音は ['bi:ðiðr(ð)] (← bíðið ['bi:ðið] + þið [θr:ð]) となり, þið は強調・対比以外では無強勢の前後語である。

聞き手を誘う「勧誘形」(cohortative) としての命令形1人称複数も、直説法現在形と同形である。古ゲルマン諸語では直説法(ゴート語, 古ノルド語, 古高ドイツ語)または希求法(古英語, 古ザクセン語)だった (Krahe/Meid 1969⁷: 113f.). アイスランド語では主語 við 「私たち」はつかない(ア *Bíðum Ø* ! 待とう ↔ Við bíðum. 私たちは待つ)。この点でドイツ語とは異なる (ド *Warten wir* ! ↔ Wir warten.)。

次は、民間伝承を素材として数々の名作を残したアイスランド人作家・外交官, グリームル・トムセン (Grímur Thomsen 1820~1896) の『スプレインギサンドゥルにて』(ア *Á Sprengisandi*) の第1節である。アイスランド中央部に広がる不毛な砂礫^{さらき}地帯を走り抜ける旅人の不安を描いたこの詩は、ア

イスランドを代表する作曲家シグヴァルディ・カルダロウンス (Sigvaldi Kaldalóns 1881~1946) による歌曲として、広く親しまれている (ア riðum ← riða 馬で行く, rekum ← reka 疾駆する)。

- (17) ア *Ríðum, riðum, og rekum* yfir sandinn, / rennur sól á bak við Arnarfell, / hér á reiki er margur óhrein andinn, / úr því fer að skyggja á jökulsvell. / Drottinn leiði drösulinn minn / drjúgur verður síðasti áfanginn. 走れ 走れ (= 馬に乗って進もう 進もう riðum, riðum) 砂礫を越えて (yfir sandinn) 進め (= そして進もう og rekum) / アルトナルフェトル (山の名) に (á bak við Arnarfell) 日が^s (sól) 沈む (rennur) / ここは (hér) 邪悪な霊が^s (óhrein andinn) たむろする場所 (á reiki er margur) / 氷河の面^{おもて}に (á jökulsvell) 影が落ちるぞ (úr því fer að skyggja) / 神よ (drottinn) 愛馬を (drösulinn minn) 導き給え (leiði) / 残りの道が^s (síðasti áfanginn) 遠のくようだ (drjúgur verður) (清水 2009: 42)

一方、アイスランド語と同じく離島北ゲルマン語に属するフェーロー語では、普通、命令形単数に主語をつけない。フ¹ *Trúgv tú* mæ, sonurin. 「私を (mæ) 信じなさい (trúgv tú ← trúgva 信じる), 息子よ (sonurin)」(Lockwood 1977: 138) は、主語 tú「おまえ」を添えた強調・対比表現である。命令形 2 人称単数/複数および 1 人称複数 (古形) は、すべて直説法現在形と異なる。これは直説法だけが「統一複数」(語尾 -a<-um/-ið/-a) になったのに対して、命令形はかつての人称による区別を保っているためである。3 言語の「命令形 ↔ 疑問文」を比較してみよう (ド fahren (乗り物で) 行く, ア・フ¹ fara 行く)。

- | (18) 2 人称単数 | 2 人称複数 | 1 人称複数 |
|-----------------------------------|--------------------------|-------------------------------------|
| ド Fahr(e) Ø ! ↔ Fährst du? | Fahrt Ø ! ↔ Fahrt ihr? | Fahren wir ! ↔ Fahren wir? |
| ア Farðu ! ↔ Ferðu? | Farið þið ! ↔ Farið þið? | Föllum Ø ! ↔ Föllum við? |
| フ ¹ Far Ø ! ↔ Fert tú? | Farið Ø ! ↔ Fara tit? | Föllum Ø ! ⁴ ↔ Fara vit? |

1-3-2. ドイツ語の Sie に対する命令形

ドイツ語でも、2 人称敬称 Sie「あなた(がた)」に対する命令形では、Warten **Sie** !「お待ちください」のように主語 Sie が現れる。しかし、これは接続法 I 式の転用である。Sie は 3 人称複数 sie「彼(女)ら」に由来するので、本来、2 人称を主語とする命令形ではない。つまり、ド Lang **lebe** die Königin ! / 英 Long **live** the Queen !「女王様万歳 (= 長く生きられますように)」という接続法 I 式(仮定法現在)による願望表現の延長なのである。ド **Haben Sie** besten Dank ! という謝辞も、「感謝をお受けになりますように」という願望の意味が原義であり、bitte「どうか」がなくても十分に丁寧な印象を与える。

なお、Sie の大文字書きは 1-4-1 で述べる敬意表記の 1 例であり、sie (英 they) との区別に役立っている。デンマーク語の I [i]「君たち」(ド ihr/英 you) と前置詞 i「～の中に」(ド/英 in) の区別も同様である。I [i]「君たち」の目的格は区別の必要がないので、小文字書きして jer とつづる。

2 人称親称に対して、敬称の命令形で主語が必要な例には、オランダ語や北フリジア語フェリング方言がある。

- (19) オ **Vertel Ø/Vertelt u** eens ! 話してよ (vertellen 話す, Ø ← jij 親称/u 敬称)
 フェリ **Fertel Ø/Fertel'm** ens ! 同上 (fertel 話す, Ø ← dü 親称/'m ← jam 敬称)
 (Arfsten et al. 2019: 86)

1-4. ドイツ語の 2 人称表現— 3 人称と複数形による敬意表現

1-4-1. ゲーテ『ファウスト』を例に

2 人称は歴史言語学的に語形の変遷が激しい人称である。(6) のファウスト博士のせりふを復習してみよう：ド Mein schönes Fräulein, darf ich wagen,

⁴ フェ Förum Ø!「行こう」は古風な響きを伴う。

/ Meinen Arm und Geleit **Ihr** anzutragen? 「お美しいご令嬢様、帰宅のお供にと私の腕をお貸ししてもよろしいでしょうか」。Ihr は 3 人称単数女性 sie 「彼女」の与格の大文字書きで、「あなたに」の意味の敬称である。古くは大切な語を大文字書きする習慣があった。手紙で用いる Du 「あなた」は、そのなごりである。

このように、当時は 3 人称代名詞単数形を敬称に用いたのである。それが定着したのが、オランダ語の u 「あなた（がた）」である。u は英 Your Honor にあたる 17 世紀の Uwe Edelheid 「閣下」(>uwé>u) にさかのぼる。定動詞もこれと一致して 3 人称単数形 (V-t) となり、再帰代名詞にも 3 人称の zich を用いる（オ **U** vergist **zich**. あなた（がた）は間違っている ← zich vergissen 間違う）。英 you と同じ語源なのは、親称 jij のほうである。ここから、現在の「親称 jij 君/jullie 君たち (<弱形 je + lieden 人々)」↔「敬称 u あなた（がた）」の区別になった。

さて、メフィストフェレスはその後、マルガレーテがいる隣人マルテの家を訪れる（2896 行以下）。夫が失踪して気落ちしたマルテは、玄関に出ると、Was hat **der Herr** zu sagen? 「だんな様は (der Herr) どういうご用でしょうか」...Was bringt **Er** denn? 「だんな様は (Er) 何のご用でしょうか」と応対する。高貴な紳士に対する der Herr を Er で受けて、ともに相手に用いていることがわかる。メフィストフェレスは、Muß bei **den Frauen** Verzeihn erbeten. 「奥方様がた (den Frauen) におかれましては、どうかお許しのほどを」と、貴婦人を指す Frau の複数形で 2 人に丁重に会釈する。そして、Ich hoffe, **Sie** läßt michs drum nicht büßen. 「お宅様には (Sie 3 人称単数 ← sie 彼女) 恨まれなければよいのですが」と前置きして、唐突にマルテの夫の悲報を告げる。狼狽したマルテは，Habt **Ihr** sonst nichts an mich zu bringen? 「あなた様は (Ihr) ほかに何も私に言付けはないのですか」と返す。今度は 2 人称複数 Ihr を使っているのがわかる。おじさんのためにレクイエムを唱えるわ、と同情する敬虔なマルガレーテに向かって、メフィストフェレスは，**Ihr** wäret wert, gleich in die Eh zu treten: / **Ihr** seid ein liebenswürdig Kind. 「あなたは (Ihr) もうご結婚なさってもおかしくないでしょう。/ あなたは (Ihr)

愛らしい娘さんでいらっしゃる」と2人称複数 Ihr で毒のあるお世辞をまくし立て、ファウスト博士に引き合わせようと画策する。

1-4-2. ドイツ語 2 人称表現の変遷：親称と敬称

ドイツ語で1人の聞き手を指す代名詞は、およそ次のように変遷した (Simon 2003: 92-133, Fritz 2005: 171-182, 1998: 112f.)。

- (i) 古高ドイツ語～16世紀：親称 du ↔ 敬称 ir (9世紀末～)
- (ii) 17世紀：親称 du — Ihr — Er/Sie (3人称単数) 敬称
- (iii) 17世紀末：親称 du — Ihr — Er/Sie (3人称単数) — Sie (3人称複数) 敬称⁵
- (iv) 19世紀初頭：親称 du — Er/Sie (3人称単数) — Ihr — Sie (3人称複数) 敬称
- (v) 現在：親称 du ↔ 敬称 Sie (上下 [階層・年齢] > 20世紀後半：内外 [仲間 ↔ 世間])

敬称 ir (> ihr) の起源は、ローマ皇帝がラテン語の複数形 nōs 「我々」と自称した「尊厳の複数」(plural of majesty) に対して、家臣が複数形 vōs 「あなたがた」で応じ、フランク王国のドイツ皇帝が踏襲した慣習に由来するとされている。中世では、親称と敬称を気分や状況に応じて使い分けることもあった。今でも、敬称は疎外感や不快感、親称は軽蔑や怒りなどのニュアンスをよく伴う。17世紀には、Eure {Majestät/Exzellenz} 「陛下/閣下」、Herr/Frau 「ご主人/奥様」などを受けて、3人称代名詞単数を大文字書きした Er/Sie (← er/sie) が加わり、17世紀末には、複数に転用された Sie (← sie, 英 they) が最高度の敬称となった。敬称 Sie は、3人称と複数による敬意表現の複合形だったのである。その後、18世紀末から19世紀にかけて、民主化の進展とともにこの複雑なシステムは、最高位の Sie を残して「親称

⁵ (iii)(iv)には、最上位のド dieselben (← derselbe/dieselbe そのお方自身) もあった。

du ↔ 敬称 Sie」に簡素化した。これは階層や年齢による上下の関係だった。第二次大戦以前、子供は親に du を使えなかったのである。今では、「仲間 ↔ 世間」という内外の関係になっている。

『ファウスト』には新興の Sie は現れない。韻文戯曲という荘重な古典的文体にはそぐわなかったのだろう⁶。一方、当時も話し言葉では、Sie は普通だった。晩年のゲーテと親交があったエカーマン（Johann Peter Eckermann 1792～1854）の『ゲーテとの対話』（ド *Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens* 1836/48）から、詩人には天性と経験が必要であるのかとたずねる箇所を引用しよう。

- (20) ド „Wenn **Eure Exzellenz behaupten**“, sagte ich darauf, „daß dem Dichter die Welt angeboren sei, so **haben Sie** wohl nur die Welt des Innern dabei im Sinne, aber nicht die empirische Welt der Erscheinung und Konvenienz; und wenn also dem Dichter eine wahre Darstellung derselben gelingen soll, so muß doch wohl die Erforschung des Wirklichen hinzukommen?“ 「もし閣下が（Eure Exzellenz）次のようなご見解であられる（behaupten）とすれば」とそこで私は言った「つまり、詩人には世界が生得的なものということならば、貴殿は（Sie）その際、おそらく内面的世界のみを念頭に置かれ、現象と慣習という経験的世界は意図しておられないでしょう。したがって、詩人にその真の描写がかなうとすれば、やはり現実の探求こそが加わるべきではありませんか」

(ib. Donnerstag, den 26. Februar 1824)

ヴァイマル公国の宰相ゲーテに対して、エカーマンは最高度の敬称代名

⁶ 村上（1980: 1）参照。桜井（2001（1968）: 138）によれば、「Goethe の Faust には 2 人称として、上述の Ihr, du, 3 人称単数の Er, Sie, 3 人称複数の Sie が並行して使い分けられていて興味深いものである」とのことなのだ。

詞 Sie を用いている。さて、Wenn *Eure Exzellenz behaupten* 「閣下が次のようなご見解であられるとすれば」に注意されたい。3 人称単数形 *Eure Exzellenz* 「閣下」に動詞複数形 *behaupten* 「主張する」を当てているのがわかる。「複数＝敬称」という含みによる例外的一致によって、敬意を際立たせているのである。敬意を含意しない主語の場合には、この種の一致は見られない。現代語としては擬古的な表現になるが、「お召し上がりになりましたか」には、ド *Haben* {*Majestät*/die Dame/**der Mann*/**er*} wohl gespeist? という違いがある (*Majestät* 閣下/die Dame 奥方様, Simon 2003: 154f.)。

敬意の度合いが低下しつつあった 19 世紀の Er/Sie には、上流階級が庶民を見下す含みもあった (橋本 2006 (1956): 91)。ロマン派の作家アイヒェンドルフ (Joseph von Eichendorff 1788～1857) の人気作『^{たの}愉しき放浪児』(ド *Aus dem Leben eines Taugenichts* 1826) の最初の部分から、例を拾ってみよう。怠惰な主人公の青年は父親からいさめられて、ヴァイオリンを片手に修行の旅に出る。陽気に歌を歌いながら当てもなく道中を歩いていくと、馬車に乗った 2 人の貴婦人に呼び止められる: „Ei, lustiger Gesell, *Er weiß* ja recht hübsche Lieder zu singen.“「あら、陽気なお兄さん、あなた (Er) ずいぶん歌がお上手ね」。主人公が „*Ew. Gnaden* aufzuwarten, wüßt ich noch viel schönere.“「奥方様の御心 (Ew. Gnaden) にかなうべく、もっとすてきな歌もご披露できますが」と *Ew.* (= Euer, Ihr の属格) を用いて返答し、あてずっぽうにウィーンに行く旨を告げる。すると, „*Spring Er* nur hinten mit auf,“ 「それなら後ろにお乗りなさいよ」ということになり、首尾良く憧れの都に向かう。spring *Er* 「お乗りなさい」は主語を伴う命令形である。この Er は話者自身の品格誇示の表現であり、いわば「ごあます言葉」に近いと言えよう。

1-5. 現代ゲルマン諸語の 2 人称表現—敬称・親称の踏襲と簡素化

現代ゲルマン諸語ではどうだろうか。英語は以前のドイツ語の「親称 du ↔ 敬称 ir」と同じ「親称 thou ↔ 敬称 you」から、複数起源の you が単数起源

の thou を駆逐して一本化した。低地ドイツ語（ザ/メ 単数 du ↔ 複数 ji）は敬称をあまり使わない。スイスドイツ語（親称 チュ/ベ du ↔ 敬称 チュ ir/ベ dihr）やルクセンブルク語（親称 du ↔ 敬称 Dir）は、以前のドイツ語の「親称 du ↔ 敬称 ir」と同じである（下線部の語形については 1-6 参照）。一方、3 人称複数の転用形ド Sie にあたる敬称は完全には定着しておらず、ルクセンブルク語とベルン方言ではとくにそうである（Simon 2003: 126）。

ド Sie にあたる敬称は、デンマーク語とノルウェー語（デ/ブ/ニュ 敬称 De⁷）にも共通しているが、普通は使わない。アイスランド語（bér）とフェーロー語（tygum）もそうである（下線部の語形については 1-6 参照。以下同様）。スウェーデン語を含めて、北ゲルマン語では親称と敬称の区別がほとんど失われている（デ 単数 du ↔ 複数 I [i]（英 you/ド ihr と同源）、ブ/ニュ 単数 du ↔ 複数 dere/dei、ス 単数 du ↔ 複数 ni、ア 単数 þú ↔ 複数 þið、フェ 単数 tú ↔ 複数 tít）。これは言語構造ではなく、社会的平等意識に起因しており、動詞の変化が複雑なアイスランド語とフェーロー語でも同じである。

オランダ語は「親称：単数 jij/複数 jullie ↔ 敬称：単・複数 u」である。jij（英 you/ド ihr と同源）は 16 世紀に中期オランダ語の du（＜古オ thiú）に代わった（Donaldson 1983: 171）。jullie は「je（jij の弱形）+ lie(den) 人々」の複合である。親称 jij/jullie の使用はドイツ語の du/ihr よりも頻繁である。

ベルギーオランダ語（フラマン語）では、オランダ語圏北部 jij [jɛi] に対して、gij [ɣɛi] を用いる。g /ɣ/ < j /j/ の変化は後者のホラント方言に対して、前者のフランケン地方の方言で起こった（De Vries/De Tollenaere 1997⁴: 207）。単複同形の敬称 u は 1-4-1 で述べたように、所有代名詞 uw による 17 世紀の Uwe Edelheid「閣下」（>uwé>u）に由来し、3 人称単数由来である。本来、中期オランダ語の u は目的格で、主格 ghi（>ℳ gij）に対する目的格に用いられた（中期オ u > オ jou）（EWN 2009: 442）。ℳ gij は『欽定訳聖書』（オ Statenbijbel 1637）との連想から、荘重な響きを伴う（清水 2010b: 196-

⁷ デ/ブ De（目的格 Dem—所有格 Deres）は 3 人称複数（英 they—them—their）の転用で、ニュ De（Dykk—Dykkar）は 2 人称複数の転用である（Askedal 1994: 233）。

198)。複数も同形だが、オ jullie にならった^{ベル} gelle もアントワープ州やブラバント州で見られる。ただし、定動詞は単数形になる。

- (21) ① オ Wie ben **jij**? 君は (jij) だれ (wie) なの (ben je ~ je bent 単数形 ← zijn)

^{ベル} Wie zikt **gij**? 君は (gij) だれなの (zikt 単数形 ← zijn)

(Begine 2017: 23)

- ② オ **Hebben jullie** al honger? 君たちは (jullie) もう (al) お腹がすいたのかい (hebben [複数形 ← hebben 持っている] ~honger 空腹)

^{ベル} **Hebt gelle** al honger? 君たちは (gelle) もうお腹がすいたのかい (hebt [単数形 ← hebben] ~honger) (ib. 24)

親称の使用が少ない代表格は、西フリジア語 (単数: 親称 do ↔ 敬称 jo) だろう (ド do ↔ ihr と同源)。かなり親しくならないと、親称 do 「君」は使わない。複数形は親称・敬称の区別なく jimme 「君たち; あなたがた」(jo + men 「人々」の複合) だけなので、微妙である。大人には役割名・親族名称・人名 ((22) ①), 子供には3人称代名詞単数 ((22) ②; (14) ④参照) を用いて、敬意や親しみを表すことも頻繁にある (清水 2006: 151-154)。1-4-2 で述べたドイツ語の (ii) の段階に近いと言えよう。

- (22) 西フ ① Wol {**dokter/heit/Jan**} my even helpe? {先生 (= 医者 dokter) /お父さん (heit) /ヨン (男名)} は手伝って (helpe) くれますか (wol ~ my even)

(Boersma/Van der Woude 1980²: 30 変更)

- ② **Sy** moat net gûle, hear. お嬢ちゃんは (sy 彼女, ド sie) 泣いちゃ (gûle) だめだ (moat net) よ (hear)

(Popkema 2006: 171)

アフリカーンス語（親称：単数 jy/複数 julle ↔ 敬称：単・複数 u）はオランダ語に似ているが、敬称 u はぎこちなく、親族名称や役割名称を多用する。子供は大人に Oom「^{おじ}叔父」/Tannie「^{おば}叔母」を使うのが普通で、日本語の「おじさん」/「おばさん」に似ている。大人は改まった相手には Meneer/Mevrou（ド（Mein）Herr/（Meine）Frau）を用いる（Donaldson 1993: 124-128, 461f.）。ちなみに、(9) ①『魔王』の Mein Sohn を「我が息子よ」と訳すとバタ臭くなる。日本語で親族名称や役割名称を 2 人称に使うのは、目上の相手に対する敬称表現の場合に限られる⁸。「お父さん、社長」に対して「孫よ、生徒よ」は不自然な呼びかけである。和久井映見さん主演の名ドラマ『妹よ』（1994）、五輪真弓さんの大ヒット曲『恋人よ』（1980）や太田裕美さんの『木綿のハンカチーフ』（1975 恋人よ ほくは旅立つ……）は、これを逆手に取った効果が実った好例かもしれない。

なお、西フリジア語（敬称 jo）と並んで、アフリカーンス語でも親称を用いる伝統に反して神に敬称 u で呼びかけるのは、20 世紀になって聖書の翻訳が行われた両言語のユニークな点である。

- (23) 77 Ons Vader wat in die hemel is, laat **u Naam** geheilig word; laat **u koninkryk** kom; 天に（in die hemel）まします（wat～is）我らが父よ（ons Vader）、御名（^{みな}あなたの（u 敬称）名前（Naam））を崇めさせたまえ（laat～geheilig word）。御国（^{みくに}あなたの（u 敬称）王国（koninkryk））を来たさせたまえ（laat～kom）

（Die Bybel 2007¹⁶: 11）

西7 Us Heit yn 'e himel, lit **jo namme** hillige wurde, lit **jo keninkryk** komme. 天にまします（yn 'e himel）我らが父よ（ús Heit）、御名（^{みな}あなたの（jo 敬称）名前（namme））を崇めさせたまえ（lit～hillige wurde）。御国（^{みくに}あなたの（jo 敬称）王国（keninkryk））を来たら

⁸ (9)②のド finer Knabe に対する「かわいい坊や」という呼びかけは親称表現であり、親族名称・役割名称を敬称として使う場合とは異なる。

せたまえ (lit~komme)

(Bibel 1989²: 1379)

1-6. 人称代名詞と異分析

1-5 に挙げた 2 人称代名詞には、語頭音 d/p/t/n-を伴う語形 (d/p/t/n-PRON) が散見される。これは「定動詞 (V) + 人称代名詞 (PRON)」の語順で、定動詞の語尾が後続の母音で始まる人称代名詞の語頭に異分析された結果である (Howe 1996: 88-91)。人称代名詞の語頭音が先行する定動詞の語尾に再分析された語尾 -st (<古高ド dū, 1-2 参照) とは、逆方向の後接語 (proclitic) としての接語化から誕生した語形と言える。(24) の d/p/t/n-PRON は、ドイツ語で言えば、「V-t+ihr」(ド sing*t* ihr) の -t が ihr の語頭に付加された例にあたる。その証拠に、主格以外では d/p/t/n- はつかない。ただし、フェーロー語では類推で主格以外にも広がっている。

- (24) 2 人称複数・敬称 (ド 主格 ihr (英 you) 一対・与格 euch 一属格 euer)
 べ *dīhr*/(弱形 'er) 一対・与格 öich (↔ 𐀓 ir 一対・与格 öi)
 ル *Dir* 一対・与格 Iech/属格 Ärer ぺ *dīhr*/(n)ihr 一対・与格 eich
 ア *þið* (<古ノ it, þ-ið<(V-)ð<(V-)t+it) 一対・与格 ykkur 一属格
 ykkar
 フ *tít* (<古ノ it, t-it<(V-)t+it) 一対・与格 *tykkkum* 一属格 *tyk-*
kara
 ス *ni* (<(V-)n+i, kallen I あなたは呼ぶ, Wessén 1965: 219) 一目的
 格 er, 比較: デ I (ド ihr/英 you) 一目的格 jer)

スイスドイツ語ベルン方言は強調・対比の *dīhr* を除いて、「V + 弱形 'er [ər]」の語順で本来の語形を保っている。

(26) 1人称複数 (↓ wir 一対・与格 uns 一属格 unser / 英 we 一目的格 us)
 フ mir 一対・与格 öis ベ mir 一対・与格 üs/(n)is
 ル mir 一対・与格 eis 一属格 eiser ペ mir 一対・与格 uns
 イ mir 一対・与格 undz ニ vi/me/oss 一目的格 oss

(27) ベ ***Mer hen*** en Bensil.—***Hemmer*** en Bensil? 私たちは (mer) 鉛筆
 を (en Bensil) 持っている (hen)—私たちは鉛筆を持っているのか
 (Haag 1994⁴: 42)

㊦ Wo **gömer** ane? どこに (wo~ane) 行こうか (gömer ↔ mir gönd)
 Wo **simer**? ここはどこだろう (どこに (wo) 私たちはいるのか
 (simer (← mer [mər] 弱形) ↔ mir sind))
 (Weber 1987³: 183, 160)

— 24 —

- grammatik Fering* (Vorläufige Version, Stand 31. 12. 2019). Bräist/Bredstedt: Nordfriisk Instituut.
- Askedal, John Ole (1994) Norwegian. In: König/Van der Auwera (eds.) 219–270.
- Beginne, Sofie (2017) *Wa zegt ge? Vlaamse spreektaal voor anderstaligen*. Diest (België): Goesting in Taal.
- Bibel* (1989²) Haarlem: Nederlands Bijbelgenootschap/Boxtel: Katholieke Bijbelstichting.
- Boersma, J./Van der Woude, G. (1980²) *Spraaklear II*. Ljouwert: Algemiene Fryske Underrjocht Kommisje.
- De Vries, Jan/De Tollenaere, F. (1997¹) *Nederlands etymologisch woordenboek*. Leiden/New York/Köln: Brill.
- Die Bybel* (2007¹⁶) Bellville: Bybelgenootskap van Suid-Afrika.
- Donaldson, B. C. (1983) *Dutch. A Linguistic History of Holland and Belgium*. Leiden: Nijhoff.
- Donaldson, Bruce C. (1993) *A Grammar of Afrikaans*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Donaldson, Bruce (2008²) *Dutch. A Comprehensive Grammar*. London/New York: Routledge.
- Duden (2009⁸) *Die Grammatik*. Mannheim/Wien/Zürich: Dudenverlag.
- Durrell, Martin (1990) Westphalian and Eastphalian. In: Russ (ed.) 59–90.
- EWN (= Etymologisch woordenboek van het Nederlands S-Z)* (2009) Amsterdam: Amsterdam University Press.
- Fischer-Dieskau, Dietrich (ed.) (1995) *The Fischer-Dieskau Book of Lieder*. New York: Limelight Editions.
- Fritz, Gerd (1998) *Historische Semantik*. Stuttgart/Weimar: Metzler.
- Fritz, Gerd (2005) *Einführung in die historische Semantik*. Tübingen: Niemeyer.
- Haag, Earl C. (1994⁴) *A Pennsylvania German Reader and Grammar*. University Park and London: The Pennsylvania State University Press.
- 橋本文夫 (2006 (1956)) 『復刻版 詳解ドイツ大文法』 三修社
- Howe, Stephen (1996) *The Personal Pronouns in the Germanic Languages*. Berlin/New York: De Gruyter.
- Jellema, Rod (ed.) (1988) *The Sound that Remains*. Grand Rapids, Michigan: Wm. B. Eerdmans Publishing Co.
- König, Ekkehard/Van der Auwera, Johan (eds.) (1994) *The Germanic Languages*. London/ New York: Routledge.
- Krahe, Hans/Meid, Wolfgang (1969⁷) *Germanische Sprachwissenschaft II. Formenlehre*. Berlin: De Gruyter.

- 国広哲弥 (1982) 「人称の用法と構造—日英語を対照して」『言語学演習 '82』(東京大学文学部言語学研究室) 7-12.
- Lockwood, W. B. (1977³) *An Introduction to Modern Faroese*. Tórshavn: Føroya Skúlabólagrunnur.
- Marti, Werner (1985) *Berndeutsch-Grammatik für die heutige Mundart zwischen Thun und Jura*. Bern: Francke.
- 村上公子 (1980) 「ゲーテ「ファウスト」第二部に於ける二人称の使用」『詩・言語』(東京大学ドイツ語ドイツ文学研究室) 16. 1-16.
- 大山定一 (1970 (1947)) 『文学ノート』筑摩書房
- 大山定一 (訳) (1975) 『ゲーテ詩集』新潮社
- 大山定一/吉川幸次郎 (1974 (1946)) 『洛中書問』筑摩書房
- Pinheiro-Weber, Ursula (2010³) *Bärndütsch*. Bern: hep verlag.
- Popkema, Jan (2006) *Grammatica Fries*. Utrecht: Het Spectrum.
- Rupp, Laura (2003) *The Syntax of Imperatives in English and Germanic*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Russ, Charles V. J. (ed.) (1990) *The Dialects of Modern German*. London: Routledge.
- Russ, Charles V. J. (1990) High Alemannic. In: Russ (ed.) 364-393.
- 桜井和市 (2001 (1968)) 『改訂ドイツ広文典』第三書房
- Schneider, Wilhelm (1963³) *Stilistische deutsche Grammatik*. Freiburg: Herder.
- Schobinger, Viktor (2007³) *Zürichdeutsche Kurzgrammatik*. Zürich: Schobinger Verlag.
- 清水 誠 (2006) 『西フリジア語文法—現代北海ゲルマン語の体系的構造記述』北海道大学出版会
- 清水 誠 (2009) 『北欧アイスランド文学の歩み—白夜と氷河の国の六世紀』現代図書
- 清水 誠 (2010) 「オランダ語研究の歴史と言語規範の形成」北海道大学大学院文学研究科言語情報学講座編『言語研究の諸相 研究の最前線』北海道大学出版会 183-252.
- 清水 誠 (2019a) 「ドイツ語から見たゲルマン語一名詞の性、格の階層と文法関係」『北海道大学文学研究院紀要』158. 37-76.
- 清水 誠 (2020) 「ドイツ語から見たゲルマン語 (2) —属格と所有表現」『北海道大学文学研究院紀要』160. 37-96.
- 清水 誠 (2021a) 「ドイツ語から見たゲルマン語 (3) —名詞の性の発達と複数形の形成」『北海道大学文学研究院紀要』162. 35-101.
- 清水 誠 (2021b) 「ドイツ語から見たゲルマン語 (4) —冠詞と指示詞」『北海道大学文学研究院紀要』163. 1-22.
- 清水 誠 (2021c) 「ドイツ語から見たゲルマン語 (5) —人称代名詞」『北海道大学文学研究院紀要』164. 19-41.
- 清水 誠 (2021d) 「ドイツ語から見たゲルマン語 (6) —3人称代名詞, 再帰代名詞, 所有

代名詞」『北海道大学文学研究院紀要』165. 31-60.

Simon, Horst J. (2003) *Für eine grammatische Kategorie >Respekt< im Deutschen*.
Tübingen: Niemeyer.

Troelstra, Pieter Jelles (1981) *Samle fersen/Verzamelde gedichten*. (ed. Steenmeijer-
Wielenga, Tineke J. et al.). Baarn/Ljouwert: Bosch & Keuning/De Tille.

Weber, Albert (1987³) *Zürichdeutsche Grammatik*. Zürich: Verlag Hans Rohr.

Wessén, Elias (1965) *Svensk språkhistoria. I*. Stockholm: Almqvist & Wiksell.